

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

19

一つの川の源流をどこに求めるかは、簡単には決められないようだ。下流から本流をたどって遡根川を含わせて大船渡湾に注ぐということになっている。

づいていはば源流にたどり着ける訳だが、二つの川の合流点では、どちらが本流でどちらが支流なのかの判断にまよふことがある。

が、最上流域の様子を見ると、鷹生川の大沢溪谷の方が、源流と言つてもいいほどの品格を備えているように思える。

大沢の谷は明るく、花

一般的には、水量の多い方、もしくは河床の低い方を本流としているようにだが、川の「品格」から見た場合は、支流の方に源流の存在を求めたい場合がよくあるものだ。

五葉山と盛川もそんな関係にある。盛川は大船渡市日頃市町上石橋の国有林20林班（黒岩の南西斜面）に源を発し、坂本

崗岩の河原を歩くのは正に自然の懷に抱かれるような安らぎを覚える。太沢小屋の上部で古い林道を右に見て沢へ入ると、大きな岩が累々とした河原を行く。登るにつれて二ヶ前後の小さな滝が次々に現れ、楽しく登ることが出来る。

五葉山の標高八六三メートルの地点の二股の辺りから、

ヒノキアスナロが両岸に目立ち始める。幾つかの滝を越し、大岩を苔に染み入るように落ちる三層ほどの滝を巻くと、明るく開けた河原に飛び出す。

ここが大沢の源流という訳だ。源頭からは大船渡湾を見下ろすことができ、盛川の源流としての品格は十分である。

上石橋を流れる本流は、途中の伐採地や植林

その上流に、核心部と地を経て、有住倉林道と

上石橋を流れる本流は、途中の伐採地や植林を経て、有住倉林道と林の東の端まで突き上げ

一つになっている水無瀬が、大きな険しい谷となって落ちてゐる。この谷は甲子町大松からの登山道が横切る辺りは伏流となつてゐるが、上流、下流とも大きな滝をいくつも掛けていて、沢登りの良いルートになつてゐる。

ている上流部は、五百以
以上にわたって滑滝が続
き、壮観の一言に尽き
る。冬は蒼氷に覆われ、
異次元の世界を堪能す
ることが出来る。

【執筆者プロフィール】大船渡市日頃市町在住、五十二歳。五葉山自然倶楽部で写真展を主要事業に据え、フォーラムや講演会、学習会をも主

人それぞれ山の楽しみ
方があろう。花の季節の
華やかな美しさに接する
ことも喜びに違いない

体的に実施している「森の文化塾」の事務局長。伝統的な行事として定着している「上有住小学

五葉山に源流をたずねて

大船渡市日頃市町

中嶋敬治

が、四季を通じて源流を訪ね、静かな流れの中や、厳しい氷の世界に身を置くことも、私にとっては大きな喜びである。そして、その両方の楽しみを十分に満喫させてくれるのが、五葉山だ。

校自然観察会」の企画、運営、実施の基礎を築く。早池峰の環境保全に取り組む個人や団体のネットワーク組織「早池峰フォーラム」代表も務めている。

も言える大滝がある。落差は四十呎もあろうか、傾斜がゆるく岩が重なっているので、登るのが困難である。呼ばれる営林署の専用林道終点から沢に下り、水量の少ない静かな流れを辿っていく。

ケヤキをはじめとする

この滝を越すとすぐ二股となり、右俣に入ると水流は細くなり、ガレ場が出てきて源流近しと感ぜさせる。アザミとシヤクナゲが密生したヤブに苦勞しながら、足元の水の音を辿って前に進むと、稻荷神社の脇の水場に達する。

広葉樹が兩岸に林立する中に、流れはしだいに細くなり、シダが生い茂る斜面にいつの間にか消えてしまふ。源流としての存在感は大沢に比べて地味であるが、趣を感じさせる流れである。

五葉山の北面には、釜石に注ぐ甲子川の源流の

五葉山の北面には、釜石に注ぐ甲子川の源流の



釜石市甲子川大松沢支流「沢桧沢（さわひざわ）の滝」